

自閉症スペクトラム障害成人に対する余暇支援

—適応行動の状態ならびに自己選択・自己決定を尊重した活動実践から—

畑原 幸貞¹⁾・成田 泉²⁾・島田 明子²⁾・水内 豊和

Leisure Activity Support for Adults with Autism Spectrum Disorders: Practical Study deal with Parsons Status about Adaptation Behavior and Maximum Ensure Self-Choice and Self-Determination

Yukisada HATAHARA, Izumi NARITA, Akiko SHIMADA & Toyokazu MIZUUCHI

本研究では、ASD成人に対する適応行動の状態から、過不足ない余暇支援のあり方について検討するために、ASD成人4名とともに余暇活動の立案、計画、実施をおこなう活動の実践をおこなった。その結果、支援者は、余暇に関するアセスメントや余暇を楽しむ成員全体を見越した支援方策のあり方、余暇支援をおこなう上でいかに自己選択・自己決定の機会を保障しつつ本人の強みを引き出し、それを生かすことのできる場を提供する方法などについて本実践を通して提示された。

キーワード：余暇、国際生活機能分類、自己選択・自己決定、本人の強み、適応行動

Key words : Leisure Activity, International Classification of Function (ICF), Self-Choice and Self-Determination, Person's Strengths, Adaptation Behavior

I. 問題と目的

余暇の時間は自分らしい生活を送る上で欠かせない要素の1つであり、生活の質 (QOL) を高めるためにも必要であると考えられる。近年、自閉症スペクトラム障害 (以下: ASD) のある人について、地域生活を送る上で、就労に関してだけでなく、成人期に対する余暇支援への関心が高まっている。ASDのある人の余暇の実態として、地域資源の利用や人間関係が限られている者が多くいることや、休日に一緒に過ごす人が、保護者とだけ、あるいは兄弟姉妹とである者がほとんどであることなど、余暇生活の実態の乏しさが明らかにされている (武蔵・水内, 2009ほか)。そのため、ASDのある人たちが家庭や地域生活で充実した余暇を過ごせるための支援が模索されている。

余暇を含めた、ASDの適応生活スキルの乏しさは障害特性として起因すると考えられてきたが、今日では活動や社会参加、環境因子という視点を含めた国際生活機能分類 (ICF) という普遍的な考え方の中で捉え

ることが重視されている。ASDのある人たちはその特性ゆえに、余暇においても困難さがあることが指摘されている (日戸, 2009)。したがって、こうした個人 (特性) と環境との相互作用を見据えた対象理解に基づき、充実した余暇を過ごすためには、自己選択・自己決定による本人の強み (良い所・できている所) を生かした支援が重要だと考えられる (水内, 2010)。

本実践を行うにあたり、T県内の発達障害児・者親の会「Yの会 S部」 (以下: 「S部」) に所属する成人に協力依頼し、少人数による余暇活動の企画サークル (以下: 役員会) を作成した。「Yの会」とは「小学生グループ (6歳~12歳)」、「中・高学生グループ (12歳~18歳)」、「青年グループ (18歳~25歳まで)・S部 (26歳~)」と3つのグループに分かれて活動を行っている。筆者は平成21年度よりこのYの会のスーパーバイザー・ディレクターとして保護者および当事者の相談援助・活動支援に携わっている。「青年グループ・S部」のコンセプトは、「アフターファイブを楽しむ大人の時間」とし、月に1回程度の活動を行い当

1) 独立行政法人国立病院機構富山病院

2) 富山大学大学院人間発達科学研究科

事者たちの主体性を重視して実施している。年度初めに「青年グループ・S部」の当事者たちで年間の活動内容を決め、年間計画（表1）を立てた。しかし、実施内容の決定は当事者であるメンバーによるものの、各回の具体的な計画の立案については、T大学の学部生が主に担っており、当事者の意見が反映される機会は意識しつつも多くはないのが現状であった。そのため、筆者は以前より、このS部の活動において、より当事者の自己選択・自己決定の機会を高めたいと考えていた。

そこで本実践では、新たにS部と付随した「役員会」を立ち上げ、この役員会を通して当事者たちが自身でS部の活動内容を立案、計画、実施する活動を行い、自分の強みに気づいたり、他者の獲得しているスキルを学習したりする機会を設ける。そしてこれを通して、自己選択・自己決定を尊重したASDのある人に対する余暇支援に求められる支援方法や、支援者に求められる支援に対する構え、そして余暇支援のあり方について検討することを目的とする。なお、本実践における「余暇」は、ジョフレ・デュマズディエ（1972）、工藤・斉藤・片山ほか（2004）を参考に、「好きなこと・趣味（障害特性としてのこだわり起因するものも含む）など、自分が自由に使える時間の過ごし方」と定義する。

表1 S部の年間計画

青年グループ・S部の年間活動予定		
日にち	活動内容	対象者
4月X日(金)	年間活動決め	青年グループ・S部
5月X日(土)	カラオケ	青年グループ
6月X日(土)	ビアガーデン	S部
7月X日・Y日(土・日)	キャンプ	青年グループ・S部
8月X日(土)	アウトレット	S部
8月X日(土)	BBQ	青年グループ
10月X日(金)	一日旅行の打ち合わせ	青年グループ・S部
11月X日(土)	一日旅行	青年グループ・S部
12月X日(土)	カラオケ・忘年会	S部
1月X日(土)	新年会	青年グループ
2月X日・Y日(土・日)	温泉旅行	青年グループ・S部
3月X日(土)	同窓会	青年グループ・S部

II. 研究方法

1. 対象者：T県内の発達障害児・者親の会に所属するASDの成人4名（以下：メンバー）を対象に実施した。
2. 活動内容：S部の余暇活動は「ビアガーデン・アウトレット・忘年会&カラオケ」の3つの活動内容について役員会を実施し企画する。
例) 場所・集合時間・行き先などを選択し決定する。
ピザをデリバリーする。
例) メニューの検索・電話注文・支払いの方法などを実施する。
3. 支援期間：本事例報告については、20XX年4月～20XX年8月まで「Yの会S部」にて成年期ASDの支援に携わる（以降も継続している）。
4. 活動時期・時間：20XX.4月～20XX+1年3月（継続中）を期間とし、18時30分から役員会を実施する。活動時間は、障害者雇用や福祉就労で働いている方に考慮し時間設定をした。
5. アセスメント：本実践をおこなうにあたり、対象者に対し、Vineland- II による評価、WHOQOL26による評価をおこなった。Vineland- II について、本研究では、全項目（5領域401項目）から、コミュニケーション、日常生活スキル、社会性スキルの3領域に着目し、それらの下位領域における個人内の「強み(S)」と「弱み(W)」について評価した。「強み(S)」と「弱み(W)」については、マニュアルに従って、 $S = v$ 評価点 - 中央値 ≥ 2 、 $W = v$ 評価点 - 中央値 ≤ -2 を基準として評価した。また、適応行動総合点（平均100、標準偏差15の標準得点）についても算出した。WHOQOL26については、各領域における平均点、QOL全体の平均点について算出した。Vineland- II の結果を表2に、WHOQOL26の結果を表3に示す。
6. 構成メンバー：メンバーの他に特別支援教育を学ぶT大学の学部生4名がピアサポーターとして加わる。
7. メンバー選出：4月の年間活動決めの際に、当事者たちに今回の取り組みについて説明をしてから自薦にてメンバーを決めた。
8. 倫理的配慮
対象者及び保護者に対して、本実践の趣旨の説明を行い同意が得た方のみ対象とした。また得られたデータは個人が特定できない形で利用した。

表2 Vineland- II 結果

	コミュニケーション		日常生活スキル		社会性スキル		適応行動 総合得点
	S	W	S	W	S	W	
A氏		表出言語	身辺自立	地域生活	コーピング スキル	遊びと余暇	60
B氏	受容言語	表出言語		家事	対人関係		43
C氏	受容言語	読み書き	身辺自立	地域生活	対人関係	遊びと余暇	35
D氏		表出言語	身辺自立	家事	コーピング スキル	対人関係	71

表3 WHOQOL26結果

	身体的領域	心理的領域	社会的関係	環境	QOL平均
A氏	3.71 (3.39±0.59)	3.50 (3.29±0.57)	3.67 (2.98±0.61)	3.63 (3.02±0.54)	3.60 (3.17±0.45)
B氏	2.71 (3.39±0.55)	2.83 (3.21±0.62)	2.00 (3.09±0.71)	2.63 (3.12±0.52)	2.53 (3.20±0.42)
C氏	3.29 (3.39±0.59)	3.33 (3.29±0.57)	2.33 (2.98±0.61)	3.13 (3.02±0.54)	3.02 (3.17±0.45)
D氏	2.86 (3.39±0.55)	3.00 (3.21±0.62)	3.33 (3.09±0.71)	3.38 (3.12±0.52)	3.11 (3.20±0.42)

※ () 内は年齢層別・性別の平均値

【対象者の概要：A氏】

対象者：A氏、男性（32歳） 診断名：言語性LD 手帳：療育手帳B

最終学歴：T県内の定時制高校を卒業

《生活歴》

A氏はN市の就労継続支援A型事業所に就労している。以前は企業に就労をしていたが、上司・同僚とトラブルをきっかけに、退職した経験がある。その経験が影響し、自己肯定感が低くなり、自分の頭を叩くなどの自傷行為が増え、家族ともども疲弊している状態であった。また、自分の思いを言葉で伝えることが苦手で、就学時期にはいじめの対象になり、つらい思いを経験している。自ら率先して物事を進めるタイプではないが、周囲の仲間へ気遣いができる優しい性格である。自ら役員へ立候補をした。

《アセスメントと結果》

①A氏のVineland-II 適応行動尺度の評価について
(20XX年6月実施 回答者：母親)

A氏の適応水準は低く、「表出言語」・「地域生活」・「遊びと余暇」が弱いという結果であった。この結果

から、自分の想いを言語化することが苦手なことや、受容的・共感的な姿勢で関わることが必要だと推察される。また、仲間との交流機会も少ないと考えられるため、積極的に交流の機会を設けることが必要だと考えられた。

本人の強みは「身辺自立」・「コーピングスキル」である。「身辺自立」では、自分の体調管理はできており、体調が悪い場合は自分で病院予約をしたり、自分の身だしなみを整えたりすることができる。「コーピングスキル」では、仲間への気遣いができ、自分に対しての批判的な助言をされても気持ちを保つことができる。

②A氏のWHOQOL-26の評価について

QOL平均3.60であり30代・男性の平均値が3.17±0.45であるためやや高い数値である。生活の質や健康状態は、概ね満足していると考えられる。

身体的領域：日常生活の活気や仕事、自分自身に満足している傾向がある。知らない場所へ行く場合は手助けが一部必要と考えられる。

心理的領域：幸福や喜び、楽しいという肯定的な感情を持って、自分自身のことも肯定的に捉える傾向がある。日常生活の中でストレスや否定的な感情を抱く面があると考えられる。

社会的関係：家族や友人から得られる支援や関係性も良好な傾向がある。

環境：交通機関の利用や余暇活動に参加と本人を取り巻く環境に満足している傾向がある。生活に必要な新しい技術や知識を学んだり、獲得したりする機会が少ないことに不満があると考えられる。

【対象者の概要：B氏】

対象者：B氏、男性（29歳） 診断名：軽度知的障害
手帳：療育手帳B

最終学歴：T県内の特別支援学校高等部を卒業

《生活歴》

B氏はT市内のデイサービスを利用している。明るく何事にも積極的に取り組み、争いが苦手な穏やかな性格である。趣味のボウリングや野球観戦は、自分でチケットの問い合わせや電話予約をすることができる。ボウリングが得意で、他県まで練習や試合に出かけることがある。両親の自営業の手伝いをしており、椅子を拭いたり、シーツを干したりしている。自ら役員へ立候補をした。

《アセスメントと結果》

①B氏の Vineland-II 適応行動尺度の評価について
(20XX年6月実施 回答者：母親)

B氏の適応水準は低く、「表出言語」・「家事」が弱いという結果であった。この結果から、自分の想いを言語化することが苦手なことや、受容的・共感的な姿勢で関わる必要があると推察された。また、簡単な手伝い（例えば：拭き掃除や片付け）をすることはできるが、包丁を使った手伝いや洗濯をすることが苦手なことも結果から読み取れた。

B氏の強みは「受容言語」・「対人関係」であった。相手の話を聞いて理解することが得意であることや、争いや悪口を好まず、仲間への気遣いができるB氏の特徴が読み取れた。

②B氏の WHOQOL-26 の評価について

QOL平均2.53であり20代・男性の平均値が3.20

±0.42であるため低い数値である。生活の質については、不満を抱いているが、健康状態は概ね満足している。

身体的領域：身体の痛みや必要となる投薬治療はなく、健康に過ごすことができている。日々の暮らしの活力が少なく、十分な睡眠が取れない傾向がある。身だしなみ等は家族に頼っている部分がある。

心理的領域：物事に取り組む集中力はあるが、毎日の生活を肯定的に感じにくく、容姿を否定的に感じている傾向がある。自己評価が低く自己の能力や自己に対して不満に思っている部分があると考えられる。

社会的関係：家族や友人から得られる支援については不満に感じている傾向がある。

環境：余暇活動の機会や能力、収入もあり満足している傾向がある。公共交通機関の利用や情報獲得の機会に不便さを感じている傾向がある。

【対象者の概要：C氏】

対象者：C氏、男性（32歳） 診断名：中等度知的障害
手帳：療育手帳B

最終学歴：T県内の特別支援学校高等部を卒業

《生活歴》

C氏はT市内の就労継続B型事業所に就労している。仲間の悪口を言わない明るく優しい性格である。絵を書くことを好み、自分の作品で個展を開くこともある。体調不良を理由に仕事を休むこともあるが、継続して働いている。不安なことがあると、大きな声で質問したり、同じ質問を何度もしたりすることがある。自ら役員へ立候補した。

《アセスメントと結果》

①C氏の Vineland-II 適応行動尺度の評価について
(20XX年6月実施 回答者：母親)

C氏の適応水準は低く、「読み書き」・「地域生活」・「遊びと余暇」が弱いという結果であった。この結果から、「読み書き」は支援者のサポートが必要であることが考えられた。また、仲間との交流機会も少ないと考えられるため、積極的に交流の機会を設けることが必要だと考えられた。

本人の強みは「受容言語」・「身辺自立」・「対人関係」である。相手の話を聞いて理解することが得意であることや、積極的に自分から仲間に話しかけて、他者との関わりを楽しむことができる特徴が読み取れた。

②C氏のWHOQOL-26の評価について

QOL平均3.02であり30代・男性の平均値が3.17±0.45であるため平均的な数値である。生活の質については概ね満足しているが、健康状態は満足していない傾向がある。

身体的領域：身体の痛みや必要となる投薬治療はなく、健康に過ごすことができている。十分な睡眠が取れ、日常生活の活力がある。他者に頼ってしまう面がある。仕事のことに對して不満を感じている傾向がある。

心理的領域：ストレスや否定的な感情は抱きにくく、幸福や喜び、楽しいという肯定的な感情を持って、自分自身のことも肯定的に捉える傾向がある。自分の容姿や生活の意味や目的が見いだせなく不満を抱いている傾向がある。

社会的関係：良好な人間関係であるが、家族や友人から得られる支援に不満を抱いている傾向がある。

環境：情報を得る機会や余暇活動に参加、公共交通機関の利用に満足している傾向である。お金の使い方や安全・治安に不満を感じている傾向がある。

【対象者の概要：D氏】

対象者：D氏、男性（28歳） 診断名：軽度知的障害
手帳：療育手帳B

最終学歴：T県内の特別支援学校高等部を卒業

《生活歴》

D氏は、県内の特別支援学校を卒業後、H市内の企業に就労していたが、職場の人間関係が上手くいかず退職した。就労支援センターの支援もあって現在は再就職した。現在の職場の同僚や社長の理解もあり、継続して1年以上勤務している。仕事へ行く時は自分で準備を行うが、髭を剃らなかつたり、剃り残しがあつたりするため母親が確認している。また、キャラクターカードを集めることが趣味であり、見境なく買ってしまうことがあるため母親が金銭管理をしている。部屋の片づけや掃除が苦手であり母親が行っている。自ら役員へ立候補した。

《アセスメントと結果》

①D氏のVineland-II 適応行動尺度の評価について
(20XX年7月実施 回答者：母親)

D氏の適応水準はやや低く、「表出言語」・「家事」・

「対人関係」が弱いという結果であった。トースターや電子レンジを使って食べ物を温めることができるが、手先が不器用であり、包丁を使った料理や目盛りを計ることが不得意であることも読み取れた。

本人の強みは「身辺自立」・「コーピングスキル」であった。処方された薬は自分で管理し定時に薬を飲むことができる。また、上司から叱責されるがあつても、自分の感情をコントロールして大きく乱れることはない。無断欠勤することなく勤務しており、忙しい時期には早めに出勤するなど、柔軟に対応することができる。

②D氏のWHOQOL-26の評価について

QOL平均3.11であり20代・男性の平均値が3.20±0.42であるため平均的な数値である。生活の質や健康状態は標準的である。

身体的領域：睡眠や休養が取れ活力がある。持病で薬の管理や立ち仕事で足腰が痛くなるため、医薬品の依存や痛みにも不満を感じている傾向がある。

心理的領域：ストレスなどで気持ちが優れないときはあるが、自分自身のことを肯定的に捉える傾向がある。

社会的関係：家族や友人との関係が良好であり、休みの日には共通の趣味のある友人と一緒に出かけたりリフレッシュしている。

環境：居住環境や交通機関の利用、新しい技術や知識を学んだり、獲得したりという機会に満足している傾向がある。

【メンバー全員の総合所見】

メンバーの適応水準は相対的にやや低いことが分かり、個別的な関わりが一部必要であると推測される。しかし、それぞれのメンバーが異なる強みを持っており、メンバーが持っている強みを如何に引き出すかが重要であると考えられる。

メンバーが共通として持っている強みは「人の話を聞くこと」や「慣れた所への移動すること」ができる点としてあげられた。そのため、メンバーが余暇活動で通い慣れた、T大学のプレイルームを話し合いの場とし、メンバーの役割を明確にすることで強みを引きだしやすくなると考えられた。

メンバーのQOL値が、その生活年齢・性別から期待される値と比してほぼ平均的あるいはそれ以上であるが、B氏のQOL値のみ平均値より低かった。しか

し、支援者全員の見解として、B氏の生活状況を見ると趣味のボウリングや野球観戦など余暇は充実しているように考えられ、周囲の理解もあり楽しく社会生活を送っているように見られる。

メンバーの共通する点として日常生活を過ごす上での身体面は「活力があること」や「十分な睡眠が取れていること」、心理面は「自分自身を肯定的に捉えること」があげられた。B氏も活動に積極的に取り組んでおり、満足している様子がみられるものの、検査結果では自分自身に満足していない傾向であった。社会面は、「特定の人との人間関係が良好であること」、環境は「余暇活動への参加と機会があること」が共通して満足している傾向がある。

「総合所見」に基づく支援仮説、短期・長期支援目標の設定、支援計画の策定

【短期支援目標】

- ・メンバー自身が自分たちの強みに気づく。
- ・他者の獲得しているスキルを学習する。

【長期支援目標】

- ・「Yの会」の活動以外で当事者同士が余暇活動を立案・計画・実施することができる。

【支援計画の策定】

- ・メンバーの強みを発揮するために、活動内容を企画しやすい環境作りを行い、自己選択・自己決定の機会を設けメンバーの強みを生かす役割を決める。

Ⅲ. 結果

【20XX年5月X日 第1回「役員会」の話し合い】

参加メンバー：A氏、B氏、C氏

欠席メンバー：D氏（仕事のため欠席）

準備物：パソコン（インターネット可）、ホワイトボード、過去のピアガーデンの活動で利用したことのある会場資料、ペン、メモ用紙、電話機

活動内容：

ピアガーデンのことについて、「会場を決めること」、「集合する時間・場所を決めること」、「活動する時間を決めること」に絞って話し合いを行った。

話し合う前にメンバーには強みを引き出せるよう役割を担ってもらった。役割内容は「パソコンで検索」・「電話予約」・「メモを取る」を提示した。役割を決める際、メンバー自身が自分の強みを認識しておらず時間がかかったが自分で選ぶことができた。

役割分担：

A氏：パソコンを使用して会場を検索する。

B氏：メンバーで決定した会場に電話予約する。

C氏：いつ、何時に、何名、予約者名、連絡先などのメモを作成する。

ピアガーデンでの話し合いの様子：

ピアガーデンの場所を決める際、A氏がパソコンでT市内のピアガーデン会場を検索した。複数の会場でピアガーデンを行っていることが分かり、過去に行ったことのあるピアガーデンの経験を話したり、ホームページの情報を見たり、ピアサポーターの意見を聞いたりしながら会場を1つに決めた。「他の会場より時間が長かったこと」、「屋内で雨天の場合も大丈夫であること」、「行ったことがあり食事がおいしかったこと」という意見がメンバーからあがり会場が決まった。

C氏はピアサポーターと一緒に電話予約する内容を考え大きな字で日にち・時間・人数・連絡先をメモ書きした。B氏はメモ書きを基に会場へ電話予約をした。その際、「緊張する」という言葉が聞かれ不安そうな様子が見られるも、ピアサポーターがB氏に対して、「大丈夫、近くにいるよ」と声掛けした。B氏は安心した様子で電話予約をするが店員から団体名の「Yの会」はどのように書くのか、という質問に対して答えることができず、ピアサポーターに代わることがあった。

この電話予約の場面をICF関連図に示すと図1のようになる。それぞれの強みを生かしてピアガーデンを予約することができた。

【20XX年6月X日 「ピアガーデン」実施】

当日は雨天であったが、メンバーが雨天時でも困らない屋内の会場を予約したため活動に影響なく実施することができた。

A氏はお酒を飲むことが好きで今までの活動でもお酒を飲むことがあったが、控えて周りの様子を見ながら飲んでいった。しかし、今回の活動では、酒豪ぶりを発揮し楽しそうに飲み食いする様子が見られた。

B氏は集合時間に遅れている当事者のことを心配し、電話連絡をしたり、近くまで迎えに行ったりと活動に協力的な姿が見られた。

C氏は以前行ったことのある場所であり、自ら進んで食べ物を選ぶ様子が見られた。また、自分たちが企画した活動であるため、毎回の「Yの会」活動も楽しいが、今回は自分たちで決めたところだからさらにうれしいとの声が聞かれた。メンバー以外の当事者からも楽しいという声が聞かれうれしそうな様子が見られた。

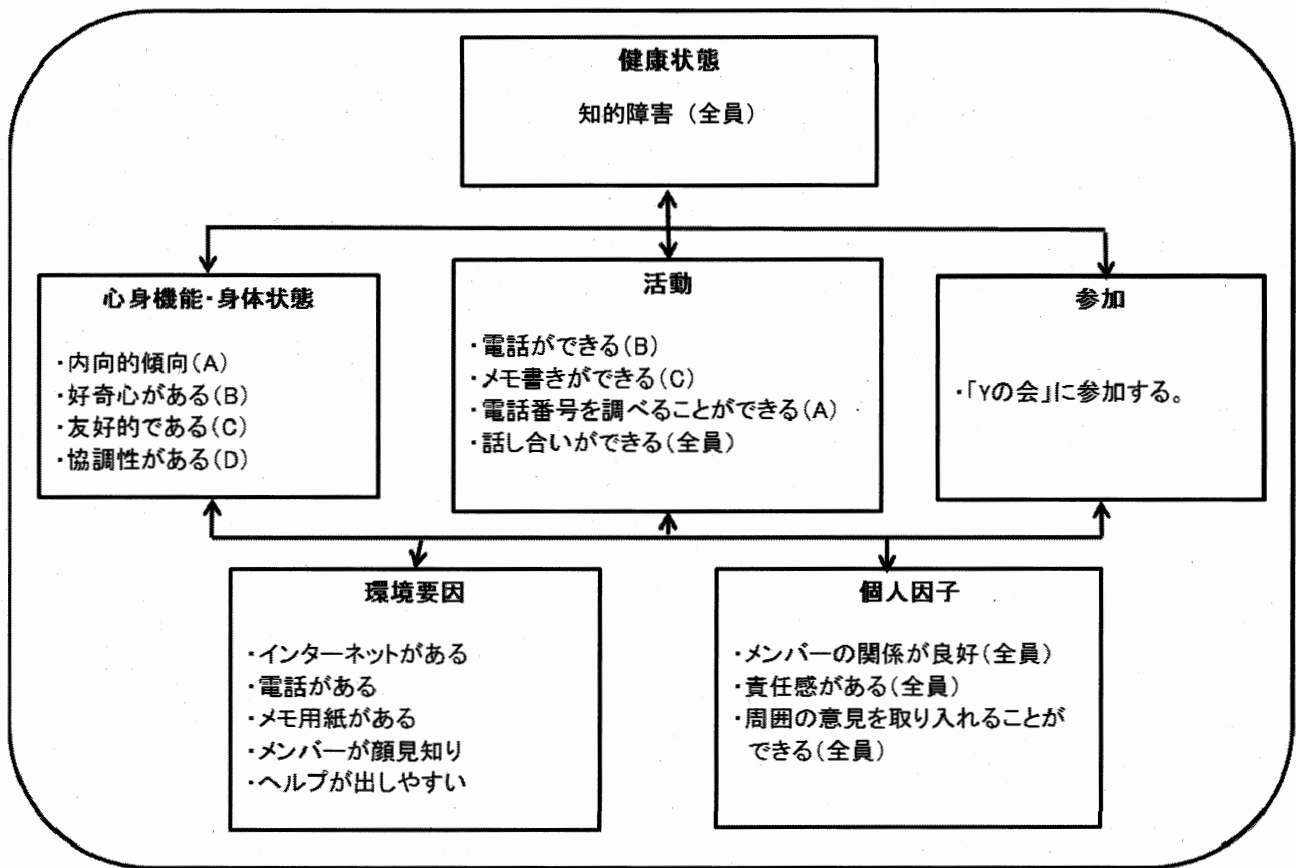


図1 グループのICF相関図 (電話予約)

【20XX年7月X日 第2回「役員会」の話し合い】

参加メンバー：A氏、B氏、C氏、D氏

準備物：パソコン (インターネット可)、ホワイトボード、ペン、紙、ピザのチラシ

活動内容：

アウトレットへの行き方やどのような店が入っているかを自宅で事前に調べ、みんなで話し合った。また、夕食をデリバリーピザにし、メンバーの強みを生かして注文した。デリバリーピザを注文する際に自分の強みを気付いてもらうように支援した。

役割分担を決める際は、第1回の役員会の成功体験やメンバー自身が自分の強みを認識したこともあり、早く役割を決めることができた。

役割分担：

A氏：パソコンでピザ店とアウトレットの情報を検索する。

B氏：人数分のピザを電話予約する。

C氏：ピザの注文や電話番号、注文者などのメモを作成する。

D氏：電卓を使用してピザの金額を計算し、一人分の金額を出す。

A氏・B氏・D氏：事前に調べたアウトレットへの行

き方やおすすめの店を紹介した。

※C氏：インターネットを使える環境でなかったこと、またパソコンを使ったこともないため、他のメンバーの話の聞いたり、A氏にアウトレットのことを検索してもらったりした。

デリバリーでの話し合いの様子：

メンバーにピザをデリバリーした経験があるかを聞いた際、D氏は経験があると答え、A氏・B氏・C氏はデリバリーの経験がないと答えた。メンバーとピアサポーターの分を注文することもあり、D氏も大人数のピザをデリバリーした経験はないと話した。

割り勘については、A氏・B氏・D氏は経験したことがあるがC氏は割り勘についても理解できない様子であり、ピアサポーターに支払うお金のことについて何度も質問することがあった。

チラシとインターネットを使用してメンバーの食べたいピザを選び、自分の選んだピザの理由を聞くと、「自分の好きな具材が載っている」、「人気ナンバー1と書いてあるピザを選んだ」という意見が多かったが、D氏は4種類の味が味わえるピザを選び、その理由として、「みんなでいろんな種類が食べられると良いと思って選んだ」という意見を述べた。また、C氏から

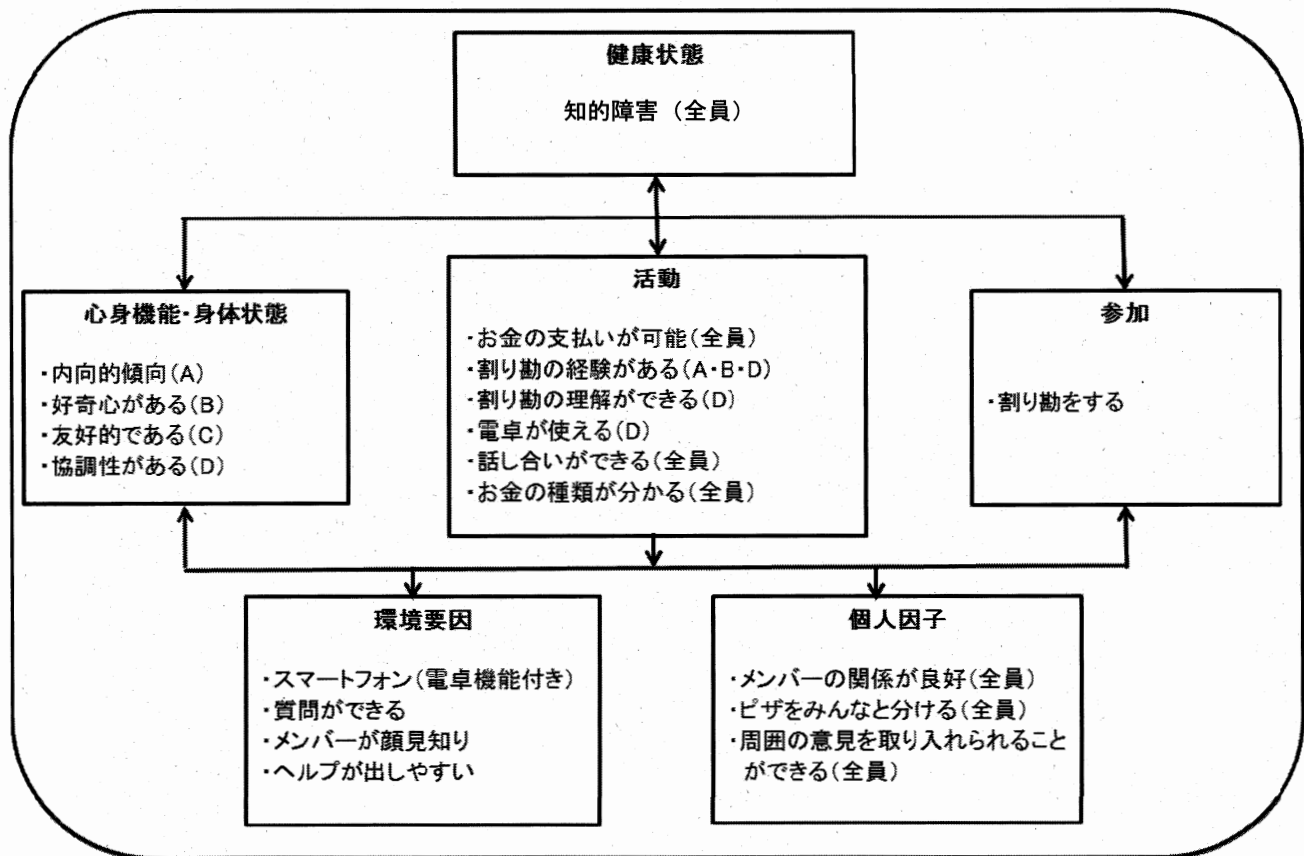


図2 グループのICF相関図（割り勘）

は、「ピザだけでなくサイドメニュー（皮付きポテト）を注文してもいいですか」という質問があり、メンバーの意見を聞き合意を得られたため注文した。

メンバーが選んだピザの枚数を数えると食べきれない数だと分かりピザのサイズと枚数について再度、話し合った。インターネットでサイズがS(1人前)・M(2~3人前)・L(4~5人前)の3つの種類があることが分かったが、ピザのサイズがイメージできないメンバーもいたため、ホワイトボードに図を書き分かりやすく提示した。話し合いの結果、Mサイズのピザを6種類注文することに決めた。

C氏がホワイトボードに書いたメニューをメモ書きしB氏に手渡した。B氏は前日も電話予約をしており、自ら率先して役割を担当した。今回はピアサポーターに代わることなく、スムーズに注文をすることができ自信がついたような様子が見られた。D氏が携帯の電卓機能を使用して合計金額を人数分で割り、1人分の金額を出すことができた。

ピザがデリバリーされた際、メンバーが受け取りに行きたいという声が聞かれ自分たちで注文したことが達成感につながったと考える。ピザを食べている時にA氏とC氏は自分のペースで何枚も食べそうになったため、ピアサポーターが「周りの人たちの分がな

くなるよ」と声掛けをした。A氏・C氏とも他のメンバーたちの様子を見てからピザに手を伸ばす様子が見られ、みんなと楽しく夕食を食べることができた。この割り勘の場面をICF相関図に示すと図2のようになる。それぞれの強みを生かし割り勘を行うことができた。

「アウトレット」での話し合いの様子：

アウトレットへ行った経験があるかどうかメンバーに訪ねてみると、全員が行ったことはなく、今回が未知の体験であることが分かった。その中でも、メンバーは自分たちの持っている強みを生かしアウトレットへの行き方やどのような店があるかを調べて来た。

A氏：飲食店や観覧車があることを調べて来た。

B氏：自分の趣味がスポーツだったのでスポーツ店やA氏同様に飲食店があることを調べて来た。

C氏：アウトレットに本屋があるか気にしており、A氏に調べてもらった。アウトレットに本屋がないことが分かったと諦めた様子であった。

D氏：複数の行き方を提案してくれ、その中でも、金額の安いものを薦めてくれた。飲食店やおすすめの店（レゴやポケモンスター）を調べて来た。

【20XX年8月X日「アウトレット」実施】

当日は晴天であり暑い中であったが、メンバー全員の参加があり、初めてのアウトレットであったが楽しみにしている様子が見られた。

A氏は普段から自分で服を買いに行ったりするが、アウトレットのお店は初めてであり、ピアサポーターと一緒に洋服を選び、試着したりなどして、自分好みの洋服を購入した。

B氏は誰よりも早く集合場所に到着し、他のメンバーの集合を待っていた。その他にも、自動販売機やトイレの場所を他のメンバーに教えるなどして気配りする様子が見られた。また、初めてのアウトレットを楽しみにしており、事前にメンズ店のことを調べて来た。B氏は自ら洋服を買いに行くことはなく、今回は自分で洋服を買うことを目的にしていた。活動後に、「今度は1人でアウトレットへ行きたい」とピアサポーターに話をする場面があった。

C氏は初めてのアウトレットであり、不安を覗かせる場面が見られ、どのようなお店があるのかピアサポーターに繰り返し聞く様子が見られた。その時には、話し合いの時に話し合った内容を伝えた。アウトレットについてからは、館内を見学しどのような店舗があるかを見て回った。「レゴ」や「パズル」のお店を見たいという発言が聞かれ、自分の行きたい所が明確になった様子であった。自分の見たい所が終わると「ソフトクリームが食べたい」と積極的な発言が聞かれた。また、ピアサポーターに自分たちが企画した活動であることを話し満足した様子が見られた。

D氏は自分の好きなキャラクターのお菓子や家族の大好きなお酒をお土産に買ったり、気になるラーメンを食べたり、行列のできるお菓子店に並んだり楽しんでいる様子が見られた。お土産のお酒を買う際は、店員と相談したり、品物の値段を見たりと自分の所持金に見合った品物を購入する様子が見られた。また、お菓子店では商品券を使用して自分の気になるものを選び、サイズも食べきれるものを購入した。

【保護者から見た本人の様子や期待すること】

《役員会を通して感じられる本人の様子》

A氏の保護者：役員などで人前に立つことに対して苦手意識を強く持っており、自分にはできないと決めつけていた。しかし、周囲からの後押しもあり、役員に立候補し、立案・計画することの楽しさが分かり自信が付き頑張っている様子が見られる。

B氏の保護者：「役員会の活動」を本人がどれだけ意識しているのか分からないが、いつもより張り切っているように見える。最近は、毎日S部のメンバーと電話で連絡を取り合っており、活動について話をしている様子が見られる。

C氏の保護者：今まで学生が計画した活動に参加しているだけだったが、役員会のメンバーという自覚もあり、メモ帳を持参し忘れないよう記録をするようになった。

D氏の保護者：アウトレットの活動後、ピアサポーターと一緒に並んでポップコーンを買ったことや昼食にラーメンを食べたことなどを話し、楽しかった様子であった。仕事で土曜の活動は参加できないことがあるが、自分で休みを調整して参加できるようにしている。S部の活動を楽しんだり、仲間と会えたりするから職場でつらいことがあっても元気を出して頑張っている様子が見られる。

《役員会を通して本人に期待すること》

A氏の保護者：本人の自信のなさから、やらずにできないと思うことが多いので仲間と活動を通して喜びや積極性を伸ばすことを期待している。Yの会活動に満足しており、恵まれた環境と感じている。

B氏の保護者：本人は綿密に計画を立てて行動に移す性格なので、そのことが自分の長所と自覚できることを期待している。また、自分の興味・関心があることを他の人に自信を持って伝えることが出来ればと考えている。

C氏の保護者：こだわりが強いので少しでも柔軟性を持って物事を考えられると良いと思っている。

D氏の保護者：今後、年齢を重ねるにつれて今まで通り全ての余暇活動に参加することは難しくなると考えられる。役員会を通して余暇活動の計画や連絡などの仕方を学んでほしいと考えている。

【ピアサポーターの視点と評価】

《メンバーの強み》

A氏はパソコンで調べることが強みであり、第1回目の役員会では集合場所を話し合っている時にT駅構

内図を調べてくれた。協力的な姿勢で取り組んでおり、メンバーに対して批判的な発言はなかった。また、アウトレットで洋服を買った際に、自らお店や洋服を選んだり、試着して色合いやサイズを確認したり、クレジットカードで購入したりする様子が見られた。

B氏は役員会の役割決めの際、自主的に電話をしたいと手をあげてピアガーデンの予約やデリバリーの注文をした。またアウトレットへ行く際、直通バスで帰るため、バスの停車場所やICカードの使用ができるかの有無について電話で問い合わせし、S部のメンバーに伝える様子が見られた。

C氏は分からないことがあると不安そうな表情や発言があるが、困ったことがあるとピアサポーターに聞けるという強みがある。また他者の悪口は決して言わない気の優しい所がある。

D氏は他者の意見が聞け、自分の意見もしっかり伝えることができる強みがある。また2回目の役員会の話し合いの時、アウトレットへの行き方や交通費について調べて来てくれた。

《新たな強みの可能性について》

A氏は今までのS部の活動の中で役員会に入ったことはなく、初めて役員会に入る挑戦をした。また、服装にも気を遣い雑誌などを見てファッションについて調べ、「Yの会」ではファッションリーダー的存在である。

B氏はパソコンを使用して事前に調べて来て、アウトレットにあるメンズ店の某ブランドのVネックのTシャツを購入したり、また観覧車に乗る際に、店員に料金や療育手帳の利用について質問し、みんなに伝えたりした。また遅刻しそうなメンバーに電話連絡をしてくれた。

C氏は役員会を通して、自分たちで企画したことにより参加回数が増え、S部の活動がより楽しいものだと感じるようになった。

D氏は役員会の時に意見を提案したり、スマートフォンの電卓機能を使用して計算できたり、パソコンを使用して調べたりして強みを生かすことができた。

《今後の役員会を活動について》

2回の役員会では、メンバーそれぞれの強みを生かしてS部の活動を企画することができた。今後、実施予定である「忘年会&カラオケ」では店選びや予約の他に幹事などの役割を担ってほしいと考えている。(例：司会・乾杯挨拶・出欠と会費を集める・誘導係・おわりのあいさつなど)

S部の活動を自主的に運営することで、「新たな強みを見出す」ことや「他者の獲得しているスキルを学

習する」機会が得られると考える。しいては、「当事者同士で余暇活動を立案・計画・実施する」スキルを獲得できる機会になると考える。

《余暇支援に求められている支援方法・構え・あり方》

役員会を通して必要と考えられる支援方法は、メンバーの強みを生かす機会を設け自己選択・自己決定を尊重することと考える。留意する点として、メンバーの障害特性に合わせた意思決定のプロセスを支援することだと考える。例えば、人前に立って話すことが苦手なメンバーに対しては、支援者が代わりに伝えたりして代替方法を提示することや話し合った内容の理解が難しいメンバーに対しては、決まった内容を一つひとつを分かりやすく伝えることが考えられる。支援の構え・あり方として、支援者が指示・指導という立場ではなく、メンバーの意思を尊重し寛容な雰囲気の中でメンバー自身が考える機会を保障することであり、メンバーの自己実現につなげる支援をすることが大切だと考える。

《評価》

本実践でメンバーが立案・計画・実施することにより事前に内容を理解することができ、S部の活動をより楽しむことができたと推測する。しかし、多くの場合、余暇活動とは1ヶ月前に立案するのではなく、約1週間前から計画を立て実施するものと考えられる。しかし、S部は10数名のメンバーから構成されており、活動内容のチラシを郵送したり、出席確認等を行ったりするため現状では1週間前の計画は困難である。また、大人数で余暇活動を実施することでメンバー全員のニーズに答えることが難しく、不満を持つメンバーも少なくないと考えられる。そのため、少人数で活動を実施することも検討して行く必要があると考えられる。

将来的にはS部以外の活動で、当事者同士が余暇活動を立案・計画・実施することも可能になると考えられ、今後も役員会の活動を継続していくことで、役員会の活動をS部に伝える場があれば、役員会に興味を持ち立案・計画・実施することの機会つなげると考えられる。学部生が担っている役割をメンバーが行うことで、余暇活動を企画する力が付くと考えられる。

《今回の活動を通して余暇活動場面での般化について》

A氏は長年「Yの会」に所属していたが、人前で話をしたり、自分から主体的に取り組んだりすることが少なかった。今回の活動では、自ら率先して調べものをしたり、事前に資料を準備してくれたりと今までな

かった部分が見られたが、役員会を通してS部の活動に般化された部分は見られなかった。

だが、S部の活動をより楽しんでいる様子が見られ、T大学の教員と一緒に写真を撮ったり、アルコール類を飲んだりして楽しそうに過ごす様子が見られたことが大きな成長だと考える。

B氏は役員会を通して積極的に電話予約をする役割を果たした。日常生活においても、いろいろな場所に電話で問い合わせをすることがあり普段慣れた行為であったが、あくまでも自分自身のために行っていることが多かった。S部の活動に遅刻しそうなメンバーに連絡を取ったり、バスの停車場を聞いたり、ICカードを使用できるのかとの問い合わせをしたり、観覧車に乗る際に療育手帳で半額になるのかについて確認してみんなに伝える様子が見られた。S部の活動でアウトレットへ行った際、普段は自分で洋服等は買うことのないB氏が、事前に洋服の店を調べ、VネックのTシャツを購入した。そのことが自信となり、「今度、自分だけでアウトレットへ行きたい」とピアサポーターに話し、自分の余暇をより充実したものにしたいと考えているのだと感じた。

S部の活動場面では電話予約だけでなく、関係各所に連絡をしたり、店員に聞いたりする様子が見られ、知った情報をメンバーに伝えるという様子が見られた。

C氏は役員会を通して電話連絡をするためのメモをピアサポーターと一緒に書いてくれたり、分からないことがあると質問をしてくれたりする様子が見られた。S部の活動場面でも分からないことがあると積極的に質問をしてくれ、理解しようとする姿勢が見られた。S部の活動を通して般化された部分は見受けられなかったが、ピアサポーターに対し「S部の活動が実施できたのは、役員会でみんなで話し合ったおかげだね」という発言があった。自分がメンバーとして行き先や行き方を考えたことで活動が実施できたことに対して達成感を得ることができた。

D氏は仕事の都合で企画に参加することができなかったが、S部の活動はメンバーとして参加した。役員会では事前にアウトレットまでの行き方やお店を調べて来てくれた。D氏は思いやりのある方であり、場の雰囲気組んで発言をして、役員会を通してS部の活動場面では、他メンバーにアドバイスをすることがあった。

IV. 考察

本実践では、現在、3回実施予定のうち2回を実施し、この2回の活動で得られた知見を基に、メンバーの自分の強みに気づいたり、新たな強みを見出したり、他者の獲得しているスキルを学習することについて考察をする。また、自己選択・自己決定を尊重したASDのある人に対する余暇支援に求められる支援方法や、支援者に求められる支援に対する構え、そして余暇支援のあり方について考察をする。

1. 自分の強みを生かす

役員会でメンバーの強みである、「パソコンを使用した検索」、「電話連絡」、「メモする」また、「電卓でお金を計算する」という強みに対してメンバーはピアサポーターと共に強みを発揮してくれた。A氏・B氏・C氏については、1回目より2回目の方が自主的に役割を果たし、役割を自分の強みと感じているように考えられ、前回の役割が成功体験となり、自分の強みを理解することにつながったと推測する。

A氏については、1回目の時は、パソコンを使用し、適格な検索ワードで調べてくれた（例：T市 ビアガーデン）。検索中にみんなの話し合っている様子を聞きながら画面を進める気配りをする様子も見られた。2回目はみんなの意見通りに画面を進めるだけでなく、自分の行きたい場所・食べたい物を提示し、自分の意見を言うことができた。

B氏については、1回目のビアガーデンの電話予約では、手渡されたメモ通りに会話をしたために、メモに書いていない内容について上手に話すことができなかったが、2回目のデリバリーの電話注文では、メモ通りの内容を伝えるだけでなく、電話の相手と会話し、相手の質問に対して臨機応変に対応することができた。

C氏については、1回目の時は役割を決める際、ピアサポーターが言ったことをメモに取るだけであったが、2回目の話し合いの時は、電話のメモを作成するだけでなく、「この部分をメモに取ってもいいですか」とピアサポーターに確認し、自ら積極的に役割を果たそうとする様子が見られた。

D氏については、1回目は仕事の関係で欠席となったが、2回目は仕事を調整して参加してくれた。デリバリーの支払いの時、携帯の電卓機能を使用して1人分の値段を出してくれた。そのおかげで、割り勘がスムーズに行うことができた。

2. 自己選択・自己決定の保障

今までのYの会における活動は学部生が具体的な企画しており、メンバー自身が活動場所を決めたり、予約をしたりという機会が少なく、メンバーの意見が反映されることが少なかったと考える。メンバーの経験不足であったり、個々の持っている生活スキルが未熟であったりしたため、そのマイナス面が見立ち、できることや一部分の支援があればできることもできないと評価されることがあると考える。メンバーの強みを生かし、それを生かす機会を設けることで、本人たちの能力を発揮し過不足のない支援につなげることができると考える。

今回は初めての取り組みであり、アセスメントをもとに、本人たちの強みを生かすことのできる役割をいくつか選定し、その役割をもとに自分で選択し決定するというプロセスで実施した。自分のスキルと照らし合わせ、何をしたいのか、どのようにしたいのかを考え選択・決定する機会を設けることを重視した。

3. 新たな理解・評価と今後の課題

今回、本人の強みを引き出すという観点からICFは有効性があると考え。その理由として、ピザをデリバリーで注文するという活動に対してデリバリーをした経験がなかったり、仕方が分からなかったりという個人因子だけで見た場合、活動ができないということになる。また、「調べるツールがない」、「チラシやインターネットがない」などの環境因子によりできないということも考えられ、ICFからの観点からアプローチを考えると「できない」・「知らない」というマイナス面な視点でなく、「できる」・「知っている」というプラス面に視点を置き、アプローチをすることで参加する機会を設けることができる。今回はメンバーのできる能力を引き出しお互いの能力を組み合わせることで、ピザをデリバリーすることが可能となった。また、デリバリーを行うために環境を整え、パソコンやチラシを準備し個人(特性)と環境との相互作用の基で実現可能となった。

余暇活動は本人たちにとって楽しい活動であることが前提あり、それと同様に支援者も楽しさを共有することが重要であることを学んだ。その中でメンバーの自己選択・自己決定する機会を提供することが大切な視点だと考える。活動内容を立案、計画、実施する際、メンバーに役割を担ってもらう中で、支援者の押しつけでなく、あくまでもメンバーが自

らの意思で決め、尊重することを重視することで、メンバーたちのやる気につながったと考えられる。そのことにより、自分の強みに気づく足掛かりになると考察する。

今後の課題はメンバーが新たな強みを見出すための支援であり、今回までの取り組みでは、メンバーが持っている強みを生かした役割であったが、今後は新たな強みを見出したり、他者の獲得しているスキルを学習したりするということを見据えて役員会を実施していく必要があると考える。

そのためにも、新たな強みを見出すためのアセスメント及び環境調整の再構築が必要であると考え。新たな強みを発揮することが結果的にメンバーのQOLの向上につながると考えられる。

謝辞

本実践をおこなうにあたり、T県内の発達障害児・者親の会「Yの会」の本人ならびに保護者の皆様をはじめとする多くの関係者の皆様から多大なるご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

引用文献

- デュマズディエ, J. (1972) 余暇文明へ向かって. 東京創元社.
- 日戸由刈 (2009) アスペルガー症候群の人たちへの余暇活動支援—社会参加に向けた基盤づくりとして—. 精神科治療学, 24 (10), 1269-1275.
- 工藤朝木・斉藤紀久代・片山友哉・岡本長久・伊藤善尚・蕪木暁子 (2004) 地域における精神障害者の余暇支援に向けた取り組み—アンケートによるニーズ調査結果から—. 作業療法, 23, 313.
- 水内豊和 (2010) 余暇支援で豊かにする広汎性発達障害の人たちの生活世界: 自己選択・自己決定を尊重した知的障害者の予科活動「よかよか」の取り組み. アスペハート, 9 (1), 98-103.
- 水内豊和 (2015) 余暇生活診断テスト. 未刊行.
- 武蔵博文・水内豊和 (2009) 知的障害者の経済的自立と家庭での役割や余暇活動の実態に関する調査研究. 香川大学教育実践総合研究, 19, 39-48.